男女大学生における電車内痴漢被害の実態調査

社会学研究科社会心理学専攻博士後期課程1年
大髙　実奈

要旨

電車内痴漢被害の多くは若い女性が被害者となるが，一部で男性の被害者も存在する。本研究では，大学生の男女を対象に電車内痴漢被害の実態調査を実施した。被害経験率は女性で約37%，男性で約6%であった。女性は数回程度の被害経験の者が多く，一部に突出して被害経験回数の多い者が存在し，男性は被害経験のある者は少ないが，被害経験者の中では複数回の被害を受けている割合が高かった。また，被害の分類では，「持続型」と「一瞬型」の2つの類型に分類された。被害時の感情と対処行動については，何らかの対処行動を講じることができた場合は，対処を講じることができなかった場合と比較して，被害時に「気持ち悪い」と感じている程度が高い傾向があり，「怒り」を感じている程度が高かった。今後は被害経験や性格特性などの内的要因にも着目し，被害時の自助的な対処行動の促進要因を明らかにし，効果的な広報や教育に繋がる研究に発展させたい。

キーワード：電車内痴漢，犯罪被害，対処行動

目次

問題と目的
方法
結果
　単純集計
　被害回数
　被害の分類
　被害時の感情と対処行動
考察と展望
引用文献

問題と目的

我が国における代表的な性犯罪の1つに電車内痴漢行為が挙げられる。電車内痴漢行為は，迷惑防止条例違反，行為がエスカレートした場合には強制わいせつに該当する (野村・東本・小畠・嶋田, 2012) 。日本の，特に首都圏や大阪近郊・名古屋近郊などの都市部における旅客鉄道の発達は目覚ましく，多くの人々が電車を利用しており，通勤や通学に電車を利用する女性の多くが痴漢の被害に遭った経験を持っている。2017年に入り，東京都内や近郊では電車内で痴漢を疑われた男性が線路上に逃走し，遅延を招いたり，電車に轢かれて死亡する事故に発展したりしており，電車内痴漢行為に対する社会的関心が高まっている。

警視庁生活安全総務課生活安全対策第二係 (2016) によると，痴漢となる具体的な行為について，「衣服や下着の上，あるいは身体に直接触れて，手で下半身や尻，胸，ふともも等を撫で回す」，「背後から密着して，身体や股間を執拗に押しつける」，「衣服のボタンやブラジャーのホックなどをはずす」，「エスカレーターや階段などの場所で，スカート内をカメラやビデオで盗撮しようとする」が強制わいせつ罪または迷惑防止条例違反に該当するとして挙げられている。その他の行為についても，「スカートなどの衣服を切り裂く」，「衣服に精液等を付着させる」は器物損壊罪として，「公衆の面前で陰部等を露出する」は公然わいせつ罪として，「つきまとい，のぞき」は軽犯罪法違反として挙げられている。また，警視庁生活安全総務課生活安全対策第二係 (2017) によると，痴漢（迷惑防止条例違反）の52.7％が電車内で，19.4％が駅構内で発生しており，両者を合わせると72.1％が電車内や駅構内で発生していることになる (Figure 1) 。また，鈴木 (2000) が愛知県内の市部に居住する18歳から29歳の女性600人を対象に過去3年以内の痴漢被害について行った調査によると，被害場所については，電車・バス等の中での被害が被害総数の66.5％を占め，駅の構内は3.8％であり，両者を足すと公共交通機関の中での被害は全体の約70％となる。

痴漢（迷惑防止条例違反）の被害者は10代が28.5%，20代が45.7％を占め (Figure 2，警視庁生活安総務課生活安全対策第二課, 2017) ，そのほとんどが女性の被害者であるが，男性においても同様の被害を受けることがある。内山・及川・加門 (1998) の調査によると，上記に挙げた痴漢行為のうち，男子高校生・大学生の被害経験率は「手を握られたり，胸やお尻などをさわられた」4.1%，「乗り物の中などでしつこくすり寄られた」4.3%，「乗り物の中などで男性性器を押しつけられた」1.6％，「満員電車などで衣服をよごされたり，切られたりした」0.7％，「路上で男性性器を見せられた」2.3%，「人気のない道であとをつけられたり，待ち伏せされたりした」2.1%，「更衣室や風呂場，トイレなどでのぞかれた」4.4％となっている。

痴漢被害については、過去にもさまざまな方法で調査が行われてきた。鈴木 (2000) の方法では質問表を受け取った参加者が記入後に調査者へ質問表を返送する方法が採られ，岡部 (2005) の研究では，西日本鉄道の久留米駅構内で聞き取り調査を行った。調査への協力を求

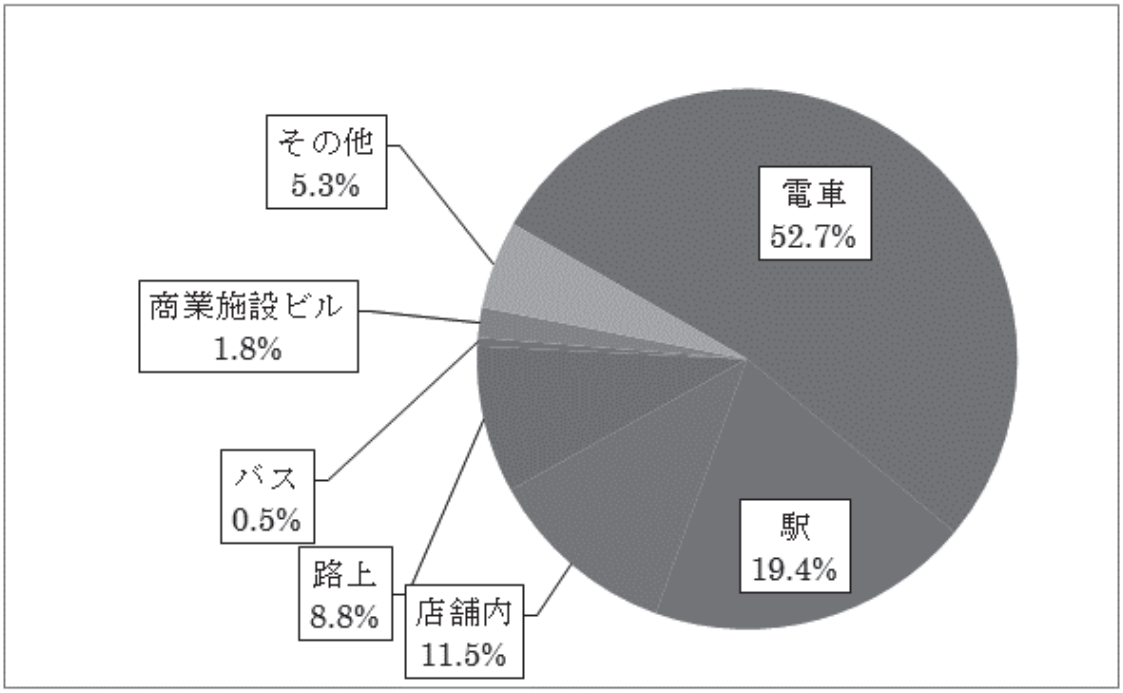

Figure 1. 迷惑防止条例違反（痴漢）の発生場所割合
（警視庁生活安全総務課生活安全対策第二係 (2017) より）

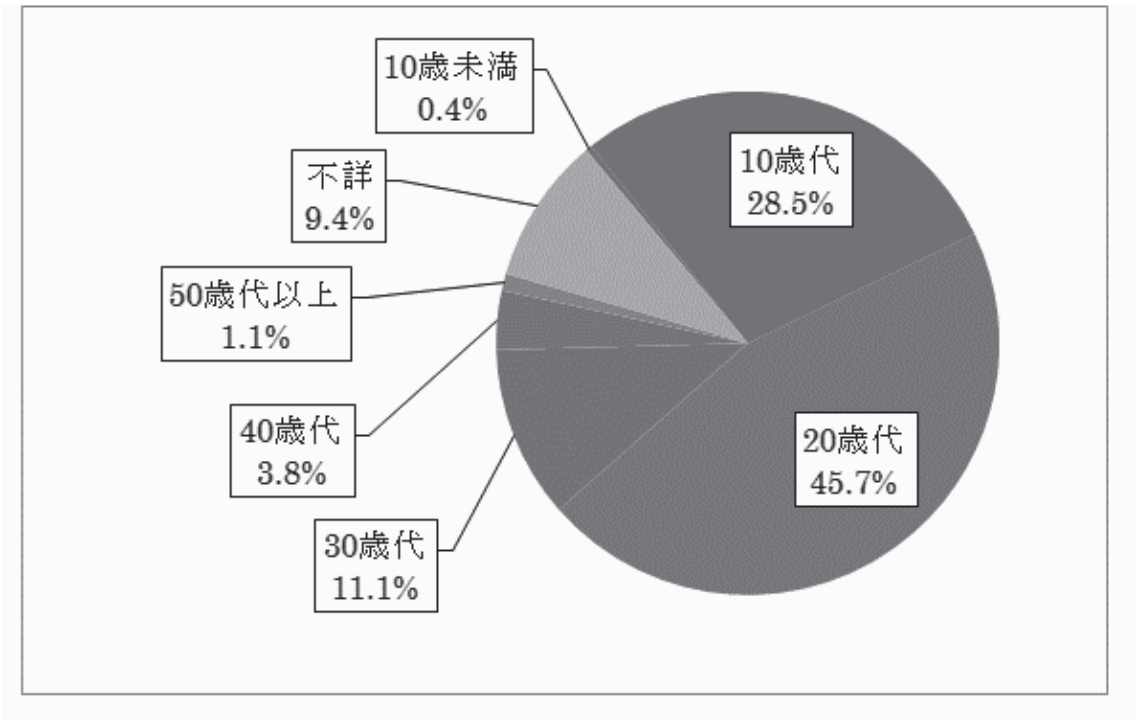

Figure 2. 迷惑防止条例違反（痴漢）の被害者の年代別割合
（警視庁生活安全総務課生活安全対策第二係 (2017) より）

められた者のうち，重大な被害に遭った者にとっては調査に協力することの心理的抵抗が非常に大きく，また，被害に遭ったことのない者は自分が調査に参加する意義が小さいと評価する可能性もある。このような方法では，実際に質問票を返送した，調査に協力した参加者には被害の経験において偏りが生じている可能性が否定できない。

本研究では，このような参加者の特殊性の影響を小さく抑えるため，大学の講義中に質問票を配布・記入・回収するという方法で調査を行う。なお，対象となる痴漢被害を電車内でのものと限定し，男女での被害経験率の差や被害内容の違いについて考察する。また，被害時に何らかの対処行動を採れた場合と取れなかった場合とで被害によって感じた不快感情の程度が異なるのか検討する。

方法

都内の大学の授業時間内に調査を実施した。被害に関する質問内容は，被害に遭った日時（曜日，時間帯），被害に遭った場所（路線，車両内の位置），被害時の混雑具合，被害内容，被害継続時間（一瞬の被害か持続的な被害だったか），犯人の性別，犯人の年齢層，被害時の感情（恥ずかしい，気持ち悪い，怖い，怒り，困惑した，驚いた）を感じた程度，被害時の対処，被害の親告状況であった。被害時の感情についてはそれぞれの感情語について「全く感じなかった」「少し感じた」「感じた」「とても感じた」の4段階から選択させた。被害時の混雑具合は鉄道各社の乗車率ランキングを参考に50～300％の7段階で回答させた (Table 1)。被害に遭った日時，被害に遭った場所，犯人の年齢層については自由記述回答，それら以外は選択式の回答とし，「その他」の項目を選択した場合は具体的に記述させた。聴取する被害は一人最大3件とし，4回以上被害に遭っている参加者には，直近の，または最も印象の強い被害3件について回答させた。回答者は，男性67名(平均年齢20.60歳, SD = 1.36)，女性115名(平均年齢20.61歳, SD = 1.28)，性別不明1名，このうち被害経験者は48名（男性4名, 女性44名）であった。

なお，本調査は東洋大学の倫理審査を受けて実施された。

Table 1. 混雑度の指標

乗車率	具体的指標
50%	ほぼすべての座席が利用されている。
100%	座席に座る、つり革につかまる、ドア付近の手すりにつかまるなどができる。
150%	肩が触れ合う程度で、新聞を広げて読める。
180%	体は触れ合うが、折りたたんだ新聞を読める。
200%	体が触れ合い相当圧迫感があるが、週刊誌や雑誌なら読める。
250%	身動きは取れず、揺れに対して踏ん張れず体が浮き上がる。人の圧力でドアが開かなくなる。
300%	物理的限界に近く身体に危険がある。

結果

単純集計

聴取できた被害内容の詳細から，車両内の位置，車両混雑度，被害を受けた身体部位，痴漢行為の持続時間について，それぞれ被害件数を算出した。車両内の位置については，「ドアの前」が最も被害件数が多く，次いで「座席上」において多くの痴漢被害が発生していた。 (Table 2) 。車両混雑度について，乗車率が100％を超えている場合を満員電車，それ以下を満員でない電車と定義し，それぞれの被害件数を算出したところ，満員電車における被害件数のほうが多かったが，満員でない電車においても痴漢被害が発生していた (Table 3) 。被害を受けた身体部位別の被害件数では，臀部が最も多く，次いで押しつけ，脚の被害件数が多かった (Table 4) 。痴漢行為の持続時間については，一瞬で止んだ被害よりも持続的な被害のほうがわずかに件数が多かった (Table 5) 。

Table 2. 車両内位置別の被害件数

車両内位置	件数
ドアの前	40
座席上	18
座席の前	12

Table 3. 車両混雑度別の被害件数

混雑度		件数
満員でない	50-100%	17
満員電車	150-300%	45

Table 4. 被害を受けた身体部位別の被害件数

被害部位	件数
臀部	37
押しつけ	22
脚	20
胸部	7
スカートめくり	4
息吹きかけ	3

Table 5. 痴漢行為の持続時間別の被害件数

被害の持続時間	件数
一瞬	31
持続	39

被害回数

聴取できた被害回数から，盗撮行為のみの被害や公然わいせつ (露出犯) の被害，性的な関心とは無関係な嫌がらせ被害などを除き，男女別の被害経験者率，平均被害回数を算出した (Table 6) 。女性の被害経験率は約37%，男性の被害経験率は約6%であった。平均被害回数について，被害経験者内の平均回数は男性2.50回 (SD = 1.91) ，女性1.99回 (SD = 1.90) であるが，被害経験のない参加者も含めたすべての参加者における平均回数は男性0.15回 (SD = 0.72) ，女性0.70回 (SD = 1.47) であった。

Table 6. 男女別被害経験率および平均被害回数

	被害経験率	平均回数	平均回数（被害経験者内）
男性	5.97%	0.15 (0.72)	2.50 (1.91)
女性	37.39%	0.70 (1.47)	1.99 (1.90)

被害の分類

分析の段階において，盗撮行為のみの被害や公然わいせつ (露出犯) の被害，性的な関心とは無関係な嫌がらせ被害などを除いた電車内痴漢被害について，コレスポンデンス分析により分類を行った。使用した変数は乗車率（50%～300%），路線（JR，メトロ，都営，私鉄），車両内の位置（ドア前，座席前，座席上），被害時の曜日（平日，土日祝），被害時の時間帯（朝，昼，夜），被害時の年齢区分（中高生，大学生），被害者の性別（被害者男性，被害者女性），犯人の性別（犯人男，犯人女），被害内容や触られた箇所（押し付け，触らせる，息吹きかけ・においをかぐ・キス，上半身，胸部，臀部，局部，脚，衣服）であった。その結果，「持続型」と「一瞬型」の2つの類型に分類された (Figure 3) 。なお，聴取した被害のプロットをFigure 4 に示す。各 Figure の縦軸は「車両内の混雑度」を示し，横軸は「被害の持続時間」を示す。それぞれの軸の固有値，相関係数，寄与率，累積寄与率をTable 7 に示す。分析には清水 (2016) のHADを用いた。

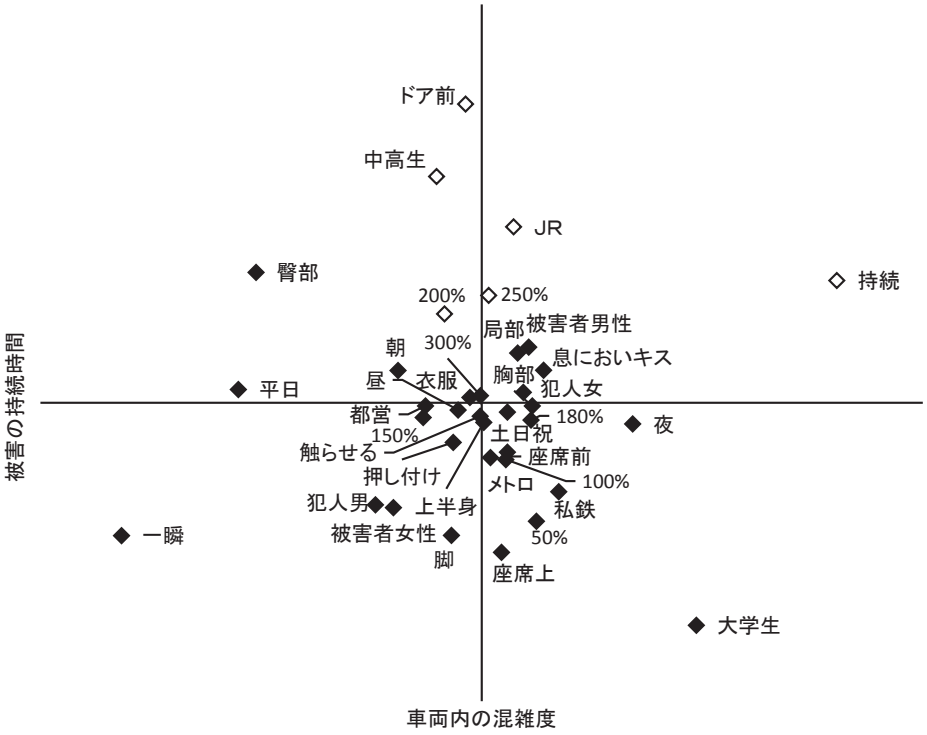

Figure 3. 電車内痴漢被害の項目についてのコレスポンデンス分析
（◇は持続型被害の特徴，◆は一瞬型被害の特徴を表す）

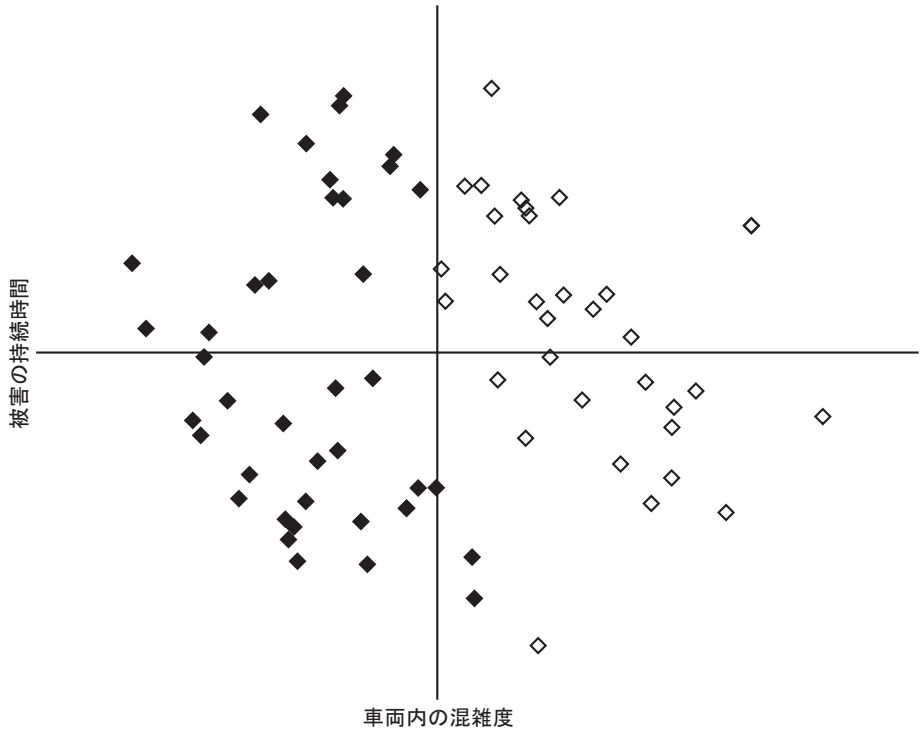

Figure 4. 聴取した被害のプロット
（◇は持続型の被害，◆は一瞬型の被害を表す）

Table 7. コレスポンデンス分析の各軸の詳細

次元	固有値	相関係数	寄与率	累積寄与
車両内の混雑度	.006	.080	.133	.133
被害の持続時間	.005	.071	.106	.240

被害時の感情と対処行動

記入に不備のなかった44件の被害について，被害時に何らかの対処行動を講じることができた場合 (24件) と講じることができなかった場合 (20件) で被害時に感じた不快感情（恥ずかしい，気持ち悪い，怖い，怒り，困惑した，驚いた）の程度に差があるか検討するため，対応のない*t*検定を行った。回答の「全く感じなかった」を1,「少し感じた」を2,「感じた」を3,「とても感じた」を4と置き換えて分析に用いた。その結果，対処行動を講じることができた場合は講じることができなかった場合より「気持ち悪い」($t(28.67) = 1.85$. $d = .58$, $p < .10$),「怒り」($t(37.90) = 2.41$, $d = .73$, $p < .05$) を感じる程度が高いことが示された (Table 8) 。

Table 8. 被害時の感情と対処行動の有無

		恥ずかしい	気持ち悪い	怖い	怒り	困惑した	驚いた
対処あり	MEAN (SD)	1.91 (1.38)	3.67 (0.32)	2.92 (1.38)	3.17 (1.19)	3.33 (0.58)	3.25 (0.63)
対処なし	MEAN (SD)	2.00 (1.05)	3.20 (1.02)	2.00 (1.26)	2.30 (1.59)	3.10 (0.73)	3.10 (0.74)
	t	-0.25	1.85 +	-0.24	2.41 *	0.95	0.60
	d	-0.07	0.58	-0.07	0.73	0.29	0.18
	df	41.90	28.67	41.18	37.90	38.58	39.34
	p	0.80	0.07	0.81	0.02	0.35	0.55

$+p < .10$, $*p < .05$

考察と展望

本研究では，調査の対象となる痴漢被害を電車内でのものと限定し，男女間での被害回数や被害内容の差異について検討した。分析の段階において，盗撮行為のみの被害や公然わいせつ (露出犯) の被害，性的な関心とは無関係な嫌がらせ被害などを除き，身体や衣服への接触を伴う（またはそれに近しい）ものと限定した。

被害件数の単純集計において，車両内の位置については，「ドアの前」が最も被害件数が多く，次いで「座席上」において多くの痴漢被害が発生していた。痴漢の被疑者に対して調査を行った痴漢防止に係る研究会 (2011) の結果では，「左右のドアとドアの間」で半数以上の痴漢被害が発生しており (Table 9)，この点は本研究の結果と一致したが，座席の前での被害件数と座席上での被害件数の割合は逆転する結果となった。車両混雑度について，満員電車における被害件数のほうが多かったが，満員でない電車においても一定数の痴漢被害が発生していた。岡部 (2004) は，西日本鉄道の女性専用車両の導入に際した鉄道利用客へのア

ンケート調査で，女性客に対して過去1年以内の痴漢被害について質問を行っている。これによると，時間帯では出勤・登校途中の午前中の時間帯に被害が多く，混雑度としては「身動きが取れない程度」，車両内における被害女性の位置としては「出入り口付近」で被害が多く，被害を受けた身体部位別の被害件数では，臀部が最も多く，次いで押しつけ，脚の被害件数が多かった。本研究では，分析の段階において対象とする痴漢被害を「身体や衣服への接触を伴う（またはそれに近しい）もの」と限定したが，「息を吹きかけてくる」や「においを嗅いでくる」といった身体接触に近しい被害が散見された。これらの行為は警視庁生活安全総務課生活安全対策第二係 (2016) の挙げる具体的な行為には含まれないが，性的な好奇心を満たすために行われ，被害者に不快感情を生起させるという点では広義に捉えて「痴漢」とみなすことができる。さまざまな行為形態の「痴漢」について，一般人の意識として不快な行為であるか，「痴漢」行為として認められると思うかといった，「痴漢」の定義に関する研究の必要性がある。また，痴漢行為の持続時間については，一瞬で止んだ被害よりも持続的な被害のほうがわずかに件数が多かった。

Table 9. 痴漢を行った場所
（痴漢防止に係る研究会 (2011) をもとに作成）

痴漢を行った場所	回答数	回答率
左右のドアとドアの間	126	57.5%
座席の前	49	22.4%
座席上	35	16.0%
不明	3	4.2%
計	219	100.0%

被害経験率や回数の差異については，女性の被害経験率は約37%，男性の被害経験率は約6%であった。先行調査の結果として，愛知県内に居住している18～29歳の女性を対象に調査を行った鈴木 (2000) の結果では，3年以内の被害経験率は33.7%，福岡県の西鉄久留米駅で女性を対象に聞き取り調査を行った岡部 (2004) では1年以内の被害経験率は28.4%となっている。本研究では想起期間を限定してはいないが，女性の被害経験率について，先行調査と大きな差はないといえるだろう。女性の被害経験率と比較するとかなり低い値であるが，男性の被害経験率も約6%と，決して少なくない割合の男性が電車内での痴漢被害を経験していることが分かった。被害経験者内の平均被害回数は男性2.50回 (SD = 1.91)，女性1.99回 (SD = 1.90)，すべての参加者における平均被害回数は男性0.15回 (SD = 0.72)，女性0.70回 (SD = 1.47) であった。すべての参加者における平均被害回数は女性の方が多く，ばらつきも女性の方が大きい一方，被害経験者内での平均被害回数については男性の方が多く，ばらつ

きは女性と比較して小さかった。このことから，女性においては数回程度の被害経験の者が多く，一部に突出して被害経験回数の多い者が存在し，男性においては被害経験のある者は少ないが，経験のある者の中では複数回の被害を受けている割合が高いということが示唆された。

被害の分類について，痴漢行為がある程度持続して行われる「持続型」被害被害と痴漢行為が一瞬の出来事である「一瞬型」被害の2つの類型に分類された。持続型の被害は比較的混雑した車内で発生しやすく，通学時間がラッシュ時と重なる中高生の被害が多い。一瞬型の被害はさまざまな混雑度で発生し，通学の時間帯が多様な大学生の被害が多い。

被害時の不快感情と対処行動について，何らかの対処行動を講じることができた場合は，講じることができなかった場合と比較して，被害時に「気持ち悪い」と感じている程度が高い傾向があり，「怒り」を感じている程度が高いと示された。「気持ち悪い」という感情は痴漢に対する嫌悪感に繋がり，「怒り」の感情は痴漢への反抗心や敵意へと繋がり，自助的な対処行動を生起させるものと考えられる。Jouriles, Rowe, McDonald, & Kleinsasser (2014) の研究では，virtual-reality (VR) を用いたロールプレイにより，参加者の女性が協力者の男性の俳優から望まない性的な誘いを受けるという実験を行い，参加者がどれくらい怒りを表現するかを第三者が評定した。この結果によると，過去に望まない性的な誘いを受けたことのある女性はそうでない女性よりも怒りを表現する程度が低かった。Jouriles, et al. (2014) の研究の実験シナリオは，パーティーで知り合った男性からの性的な誘いという，知人間レイプにつながりそうな場面が想定されていた。この点でこの研究の設定場面は見知らぬ相手からの被害である電車内痴漢被害とは異なるが，性的な被害を受けた際の怒りの感情が対処行動と関連することが示唆されている。また，被害時の対処行動に影響する内的要因としては，被害時の感情の他，被害者自身の被害経験や友人などの被害経験の聴取経験，被害を予期する程度や性格特性なども関連すると考えられる。今後はこれらの内的要因にも着目し，被害時の自助的な対処行動を促進する要因を明らかにし，痴漢被害時の自助的対処行動についての効果的な広報や教育に繋がる研究に発展させたい。

本研究では，大学の講義中に質問紙を用いて電車内痴漢被害の経験についての調査を行った。男女での被害経験率の検討は行えたが，男性の痴漢被害の件数が少なく，女性の被害との内容的な差異の検討は不十分であった。今後は，被害経験のある男性参加者を募り，男性の痴漢被害のデータをより多く収集し，男女での被害内容の違いの検討を行うことを目指したい。

引用文献

Jouriles, E. N., Rowe, L. S., McDonald, R., & Kleinsasser, A. L. (2014). Women's Expression of Anger in Response to Unwanted Sexual Advances: Associations With Sexual Victimization.

Psychology of Violence, 4(2), 170-183.

警視庁 生活安全総務課 生活安全対策第二係 (2016). 安全な暮らし 被害にあわないために 性犯罪から身を守る 痴漢は犯罪！ 警視庁ホームページ 2016年7月20日〈http://www.keishicho.metro.tokyo.jp/kurashi/higai/koramu2/koramu3.html〉(November 22, 2016)

警視庁 生活安全総務課 生活安全対策第二係 (2017). 安全な暮らし 被害にあわないために 性犯罪から身を守る こんな時間、場所がねらわれる 警視庁ホームページ 2017年2月23日〈http://www.keishicho.metro.tokyo.jp/kurashi/higai/koramu2/koramu8.html〉(March 1, 2017)

野村和孝・東本愛香・小畠秀吾・島田洋徳 (2012). 電車内痴漢行為における他者感情認知と感情反応の検討 日本行動療法学会第38回大会論文集, 210-211.

岡部千鶴 (2004). 女性専用車両に関する一考察 〜痴漢被害の実態とともに〜 久留米信愛女学院短期大学研究紀要, *27*, 57-66.

清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフトHAD：機能の紹介と統計学習・教育，研究実践における利用方法の提案　メディア・情報・コミュニケーション研究, *1*, 59-73.

鈴木眞悟 (2000). 若年女性における痴漢被害の実態 科学警察研究所報告 防犯少年編, *40*(2), 137-145.

内山絢子・及川里子・加門博子 (1998). 高校生・大学生の性被害の経験 科学警察研究所報告 防犯少年編, *39*, 32-43.

Survey on the incident of ” Chikan” to University students: type analysis of sexual victims.

OTAKA, Mina

Abstract

In Japan, a criminal act called ”Chikan” - is an act of touching and mischieving a stranger's body in a crowded train - have occurring very often. This victims of ”Chikan” were mostly females, however sometimes, cases of males become victims occur. Therefore, in this study, it researched a questionnaire survey about ”Chikan” in the train to undergraduates, and analyzed to clarify the attributes and types of victims. As a result, it was become clear that 37.39% of female students and 5.97% of male students were suffering from ”Chikan”. In correspondence analysis, it was categorized to 2 types of victims as ”lasting victimization” and ”victimization for an instant”. These unpaired *t* tests showed that the victims who can cope with ”Chikan” damage were anaerobic and angry over those who can’t deal with it.

Keywords: “Chikan”, sexual victimization, correspondence analysis